

ちょっと魔王を倒してくるわ（略して魔っちょ）

イノさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最弱勇者で、最強魔王に立ち向かえ！異世界系ポンコツコメディ、ここに開幕！「ちよつと」程度じゃ終わらない、波瀾万丈異世界ライフ。ギャグとバトルと揺れる心と成長の物語。ほんのちよつぴり涙あり(?)

目次

勇者と俺の運命と	
始まりのキラム村	1
鬼と勇者とスライムと	8
妖犬の勇氣	13
うもれた記憶	18
コウガの叫び	25
短命の英雄と劍の真価	31
神代（かみ）の世と呪われた力	38
雪の町に潜む影	44
ZADNA計画forZ	
始動！ZADNA（ザドーナ）計画	51
時の流れの中で	59

勇者と俺の運命と 始まりのキラム村

引き出しから、三冊の日記が出てきた。

「多分俺は君を知らないし、君も俺を知らないだろう。」残念ながら、君は私を知らないが、私は君を知っている。

「これはあくまで日記だ。事実だ。そのことを理解した上で、広めてほしい。」知ってるよ。忘れるわけもないだろう。なあ、もう70年も前の私よ。

やあ、皆さん。いかがお過ごしですか？ちなみにワタクシは、絶賛行き倒れ中です。前世・・・いや前世というのかも分からないけれど、まあ、そこでは食べ物に固執なんてしなかった。けど、どんだけ恵まれてたか思い知ったわ。寝返りを打てば、そこに食べ物がある生活。茶漬けに、梅干しと刻み海苔を加えて・・・ああ、腹減って死にそう。ギイ・・・ギイ・・・カチ、コチ。カチ、コチ。静かな部屋に、ロツキングチェアと時計の音が、単調なハーモニーを奏でる。

それは、「暇だなあ。」という声を一層際立たせた。桐生輝牙、15歳。中三の夏休み最終日、日曜のサザエさんなんて目じやない憂鬱が流れる日。俺は、暇を持って余していた。

「なんか、おもしろいこと起きんかなあ」そういった瞬間、頭の中に声が流れてくる。

(ごんにちは。)

「誰だ!？」あたりには、もちろん誰もいない。

(私は、いわゆる「異世界」の女神です。私の世界の人々は、毎日魔王におびえながら生きています。どうか、救って下さい。私の世界を、私の世界の人間を。)

あゝ、これ、よくあるアレ的な奴か。まあ、答えは一つだな。

「もちろん!」

(・・・!!)

「NOに決まってるだろ!!」

(!!?)

女神は、心底驚いたようだ。

「ソンの訳分かんねーことを訳分かんねー奴に訳分かんねータイミン
グで言われてハイやりますっていうわきやねーだろが!!そんな馬鹿
いるかッ!大体人の頭の中に急に入ってくるんじゃない!コエーよ
!!」

うむ。俺、正論返しは大の得意だったりする。

(で、ですけど、てつきり「もちろん」と答えたモノだとばかり思っ
て、転移魔法をかけてしまいました。)

はあ?はああ!?

「なんだよそれ!今すぐキャンセルしろ!」

(で、出来ません!帰る方法は・・・「世界樹の井戸」を、探して下さい。
い。そして、その中に潜って下さい。)

クソ女神。

「どこにあんだよそれは?」

(魔王の宝物庫です。)女神テメおま本格的にふざけんな。

「どうしてくれるんだよ!結局倒さなきゃいけねーじゃねーか!」

(ですから、非を認めているじゃないですかっ!)

キレた。女神が逆ギレした。

「どこに逆ギレする女神がいる・・・ん、だ・・・よ?」

あたりの風景が、急に森になった。

「もしもーし?エト、女神さん?」・・・アイツ、通話終了しやがった。

(よう、兄ちゃん。女神に頼まれてきたぜ!諸々説明するんだぜ!)次
から次へと、降って湧いたようにボコボコ出てきて。

(まず、あんたはこっちにいる間年をとらん。それから、こっちでの百
年は、お前らの世界では0,00001秒に満たん。それと、転移特
典を授ける。感謝しやがれ)

何様だよオマエ。

(正真正銘、神様さ!それでは少年、また会おう!アアアアでいおす
!)神って、みんなこんななのか?いや、それなら世の中もつと平和
なはず。

「アンタに売るもんなんかないよ！良く村に顔出せたね。とつとと失せなこの異端者が！」 異端者？俺のこと？

「すみません、ミルクを一缶・・・」

「そんな貴重なモノをお前になんざ売るか異端者が！」 藁の入った袋が、マコの顔に投げつけられる。

「こんなところ降りてくる暇があつたらとつととー」

「おい・・・何すんだよ。マコが何したんだよ!？」

「何もしてねーからムカついてんだよ！」

「はあ？なんだそれ？お前ー」 マコが、腕に強く抱きつく。

「良いんです。行きましよう。私が悪いんです。良いんです・・・」 ヒソヒソと、そこかしこで陰口をたたいている。クスクス笑ったり、指を指したり。

「財布貸して」

「え、あ、えと、はい。」

「すみません。」

「なんだい？」

「ミルクを一缶・・・」 無言で、こちらを見ている。バサツと新聞の音を立ててたばこの煙を吐くと、

「見ない顔だね、よそ者かい？」

「あ、ハイ、そうです。」 ゆっくりと、ページをめくる。

「すまないけどうちじゃ売れないよ。」 何でだよ。

「何でだよ何で？異端者だ？よそ者だ？そんなのカンケーねーだろっ！」

「いや、そうじゃなくて。」

「ああ!？」

「ここ、武器屋だから。」 ええ。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。。。。。。。」

「すみません」はずい。めっちゃめっちゃはずい。

「いや、こつちもその、ごめん、説明しなくて。ミルク、特別に売ろ

うか?」

「いや、良いです。」

「でもさっきあんな必死に「結構です。」そこを掘り返してくるんじゃないですよ。」

あ、マコいたいた。て、泣いてる?」

「ど、どうしたの?」

「優しいと思ってた人に、財布とられて。」

「いやとってないから!ミルク買ったただけだから!」

「え?そ、そうなんですか。すみません、人の親切になれてなくて。」ア
コー「きゃああああああああつ!!!」

「!!?」何だ?

「ぐう!!」男の人が投げられる。

「おらおら、道ばたに這いつくばって拜めるんだよ私をな!」二人組の少女のうち、骨の装飾をした方がそう叫ぶ。

「じゃーまなんだよ」誰だあいつら?ジヨロロロロロ・・・
「ん?」

「あ、あれは魔物です!」めっちゃちびってる。って、魔物!?やっぱいるのか。コスプレイヤーのパリピにしか見えないけれど。

「おら、とつとと出せよいつものやつを。」そう叫ぶが、誰一人、動かない。何だ、魂とかか?

「ちいつ」舌打ちをする。

「このキラム村限定のドラゴンパフェだよ!」パフェかよ。やっぱ渋谷のJKじゃね?そして、しばらくしてメロンらしきモノをドラゴン型に切ったパフェが出てくる。器用だなー。

「あ、あの・・・」

「あ?何だ言ってみろ。」

「か、数を減らすわけには、い、いきませんか?もう、売り上げの切り盛りが。」ギロリと店主らしき人をにらむ魔物。

「ああ!?!」

「す、すみません!」腐っても鯛、JKでも魔物?

「私が何でこんなへんぴな村をツブさないでやってるのか分かってん

けど、何をすべきだと思う?」

「え?」しばらく黙ると、ゆっくりしゃべり始めた。

「勇者の子孫は、唯一魔王を倒せる人間だそうです。」なるほど。

「つまり、探し出して仲間に入れると。」

「え? あっいや、えっと・・・? 何なんだろう。それはとりあえず、何が出来るんだ? 何も知らない、何も使えない。そんな俺なんかには、いつまでたっても、寝られない。そもそも、勇者は何してる?」

「・・・」考えるだけムダか。

「え!? もういつちやうんですか!?!」

「ああ、いったらう。勇者を探すって。」

「え、あ。」

「また、いつか、どっか出会えたら、うれしいな」

最初に会えたのが、マコだったから。どこまでも裏がなく、優しいマコだったから。この世界を、救いたいと思えた。テレビなんかで、秘境を紹介してたりする。そんなのみても何も感動しなかった。無関係な場所の、無関心なことだった。けど、俺はこの世界で生きていく。完全に隔離された、この世界で。無関係じゃない。無関心でもいられない。

「あ、あの。わ、私、私は。」

ん? なんだラブコメ的な展開が用意されてたのか?

「わ、私が、勇者の子孫なんですよね。」

ん?!

「.....」

ん?」
これまでの光景が、走馬灯のように駆け巡る。

「.....マジで?」

「まじ、です。」マジかよ。てか、この世界、

「詰んだあああああああ!」どこまでも澄んだ空に、俺の咆哮とひたすら謝るマコの声が響いて、吸い込まれていった。

鬼と勇者とスライムと

「えと、君が勇者の末裔なんだね？」

「・・・はい。」

「えと、じゃあ、魔王倒そ？」

「無理です！ムリムリムリ！そんな魔王さまなんてその名を口にするだけでも震えが止まらないのに倒すだなんておこがましい！」どっちの味方なんだよ。

「それに、どの魔王なんですか！」ん？どういうことだ？

（魔王とは・魔王種という種族であり、人間に対する悪意と殲滅可能な力を持った者達のことを指す。）なんじゃこりゃ!?

（叡智・転移特典。知りたい情報を自動的に脳に入れる。）それはそれは。これでちよつと、異世界生活が楽になりそうだ。

叡智のおかげで、転移特典の中身が分かった。「特技選択」「叡智」「超次元貫通」の三つらしい。なんだそれ。厨二かよ。わかりやすく言うと、特技選択はなんかほしい技を条件を満たせばもらえるもの。叡智は凶鑑。超次元貫通は四次元ポケット。ただし、性能は少し上になっている。ポケットに入れてないものも取り出せる・・・ポケットじゃなくね？でも、これなら。弱い魔物なら、最強の武器とか出したら勝てそうだ。

「魔物で一番弱いのは？」

「スライムですね。でも、人間じゃなかなか勝てませんよ？」自分を基準にするな。思わず突っ込みたくなつたが、まあ良い。

（叡智発動！スライムの居場所！）脳の中に3Dの地図と光る点が現れる。一番近いのは、「勇者の墓跡」？もしかしてだけど。

「勇者の墓跡って何？」

「あ、父さんのお墓です。」やっぱりか。

「父さんは、その、立派な勇者だったんですよ。私と違って。」なるほどな。

「何で、跡なんだ？墓じゃなくて。」

「・・・壊されたんですよ。「鬼」に。」鬼。頭の中に、誰かが浮かぶ。

(キミモ、コチラニオイデヨ。ナカマジヤナイカ。) 誰だ？

(ウラミヲモツモノ、オニトナル。イキナガラニシテ・・・)

「コウガさん？」はつと気が付いた。何だったんだ、今のは？

「何でもない。それより、墓参りさせてくれるか？」

「ええ？」

「興味があるんだよ。」今のが、もし、マコの父親なら。墓で何か分かるかも知れない。

「少し、待って下さい。」そう言われてもう5分ほどになる。と、扉が開いてマコが出てきた。思いつきり勇者装備だ。

「何で、そんなカツコなの？」

「ずるいですけど、父さんの前ではせめて、勇者でいたくて。・・・そうだよな。好きで勇者に生まれたんじゃない。俺みたいに、ならざるを得なかったんだ、理不尽の中で。」

「もしかして、村人に嫌われてるのは、「勇者」だから？」

「っはい、勇者なのに、魔王様が怖くていつまでも引っ込んでるから。そういうことか。」

「・・・つきました。」勇者の墓跡は、文字通り墓跡だった。砕けて地面に刺さった石、焼け焦げた砂、爪で引き裂かれたかのような地面を挟む大傷。鬼・・・

(ウラミヲモツモノ、オニトナル。イキナガラニシテ・・・)

「コウガさん？さつきから、体調でも悪いんですか？」

「あっいや。ただ・・・悪夢を見ただけだ。」何だあれは？なんだアイツは？何だ、あの言葉は？何故知ってる？知らないはずの人間、いや、まるで「ニンゲン」じゃないみたいなの言いだったな。

「立って目を開けたまま眠るなんて。コウガさんはもしや、新人類？」いや、たとえなんだが。ああ、もう、気分が悪い。半ば乱暴に花を添えて水をかけると、俺はきびすを返した。

「帰る。」

「え？もうですか。」

その時。青の半透明の生命体らしき者が後ろから現れた。人型をしているが、どう見ても【魔物】だ。隣で、マコが震えている。ラン

マー並に。局地的アースクエイク？

「すすすすすすつ」落ち着け。「す」しか言えてない。過呼吸かよ。

「スライム」です！」スライム？アレがスライム？もつとまんじゅう頭のマヌケ面を想像してたのに。人型じゃん。でも、魔物なら。

「マコ、分かるよな」

「っはい！」背中の大剣を、ゆつくりとさやごとからだから外す。

「お願いします！コウガさん！」いや、逆だろ普通。そうじゃなくて、それでアイツを倒してくれない？

「いや、でも。怖くて。」ああ、もう。

「いいか。このまま何もしなかったらカクジツに殺される。でも、戦ったら、もしかしたら勝てるかも知れない。どっちが怖い？」しばらく、真剣な顔で考えるマコ。

「えっあ・・・殺される方が、怖い？」

「よし、なら戦え！」魔物にすら慣れてないなら、魔王なんて負けイベどころの話じゃない。

マコが、剣を投げる。記録、50センチ。鞘から抜けよまずは。ズルズルと剣を引きずって戻ってくる。

（ゴクリ）「強い！」

「違う、弱い！（ゴクリ）じゃない！」

「プルプルプルプルツルツル」どんな笑い声だよ。

「弱いな、メスガキ。」そうだ、よくぞ言った！

「はい、よく言われます」だろうな。じゃなくて。

「とりあえず切れ！」

「は、はいっ！」ズバツと体が縦に裂ける。鞘に入れたままだけど。と、裂け目から触手のようなモノが出てきてマコを捕まえる。え？

「噂は、本当だったんですね。」何？噂？

「スライムは水みたいな流動体なので、物理攻撃が効かないんです。」先に言えよ。初期的のくせにスライムの強さじゃないじゃん。これガチでやばくね？

（スライム：魔物の中では一番弱い。生き残るため、特性特化型に進化した。能力値：LV3 HP1752 物攻0 物防0 魔攻349

魔防675 特性：流動体 物理攻撃完全無効化。自由に体の形を変えられる。 蒼き鏡身(かがみ) 光属性攻撃反射。 反射時、水属性を上乗せする。 状態変化 自身の体を固体、液体、気体に変える。 周囲の熱エネルギーを使ったり、周囲に拡散したりする。 特技 トラップ作成、トラップ設置 魔法 熱源感知 称号 トラップ職人、嵌めるモノ)

だ・か・ら。 初期的の強さじゃないって。

「さーて、私のお店、特等席へご案内してあげるわ。」

「え、す、すみません、財布もつてきてません。」いや違うだろ絶対。

「こけにしているの?」

「私、人を苔にする魔法なんて使えません。」スライムの額に、血管が浮き出ている。

「もういいわ。」それだけ言うと、マコを体内へ引きずり込んだ。

「いらっしやいませ!!死ねええええええ!!」きれすぎ。 てまずい、助けないと!ポケットから缶を取り出すと、走りながら投げつけた。スライムの体内に缶が入る。パキッ、パキパキッ。

「な、何じゃこりやあ!」液体窒素だ。凍った体を割って中からマコを取り出す。氷に触ったせいとか、体全体が冷たい。

「しくじった」え?もう、体が、とけてる?

「周囲の熱エネルギーを取り込んだのさ。」そういや、そんなの書いてあった。 ええい、もうどうにでもなれ!スライムに有効な中で最強武器を!ポケットから出てきたモノを見て、固まってしまった。 日本刀だったってのもあるが、その名前だ。

(妖刀)「激おこぶんぶん丸」。

は?

「!?そ、その剣は!」

「知ってるのか、スライム。」ギリつと歯が鳴る。

「大陸を七つに割った怪物だ。」なにそれやう。 ああ。 まあ、効くらしいからとどめを刺そうか。

「ま、待って。話を聞いて・・・」

「ごめん、オマエは砕け散れ。」ズバァン!今度は、横に真っ二つになっ

た。

「ああ、もう。最悪だ。もつと長生きしたかったな。……おのれ、忌々しい。」そういうこと言われると、今後魔物を殺しづらくなるのだが。ただでさえ見た目は少女真つ二つなのに。続きは、聞きたくない。でも、言葉は容赦なく、俺の耳に、脳に、入ってくる。

「〔鬼呪〕め。呪いの塊め。」呪いの、塊。

「自己紹介も、他者紹介も、地獄で飽きるほど聞いてやっから、おとなしく首を長くして待っつけ。」スライムは蒸発するように消えた。墓場は、再び静かになった。

妖犬の勇氣

「お、おの・・・れ。忌々しい、〔鬼呪〕め。呪いの塊め。」

鬼呪。鬼の、呪い。「妖刀」激おこぷんぷん丸、本名を「鬼砕ノ獄」。鬼の力を宿し、あらゆるモノを砕く、また無効化する妖刀。世界に五種のみ存在する、継承種（レガリア）の一つ。ただ、持ち主の中に鬼が入り込む。

まあ、正式な契約をしてないから本来の力を出せない代わりに、鬼が入ってくることもない。鬼。鬼か。恨みを持っているのは、お前なのか？妖刀。

「コウガさん」

「ん？何だ？」マコが、何か言おうとした言葉を、何かに押さえられているかのような顔をした。

「・・・いえ。」

（あの時、あの顔、まるでコウガさんじゃなくなったかのような、何かに憑かれたような。ずっと、もつとかつこいと、信じて疑わなかったことが、こうもあつさり変えられてしまうなんて。正義が悪を倒す姿が、こんなに怖い物だったなんて。）

目の前に転がる、スライムの、魔物の死骸。

（怖い。汚い。でも・・・ついて行かないや、また見捨てられる。・・・そっちの方が、よっぽど怖い。）

マコは、ぎゅつと拳を握りしめると、スライムが見えないよううつむきながら早足で歩いた。

（大きい。怖い。その背中が。私は、私は初めて自分を勇者の子孫としてじゃなくて、自分として見てくれる人に出会えた。うれしいことだと思った。喜ぶべき事だ。でも、よっぽど、怖い。見捨てられたら？嫌われたら？あきれたら？自分が、必要じゃなくなったら？怖い。ひたすらに怖い。ああ、私は・・・やっぱ弱い。）

じゃく、じゃくつと雨でぬかるんだ土が音を立てる。

「なあ、本当に、旅に出る気なのか？」

「それは、その・・・」怖い。見捨てられるのが怖い。必要でなくなる

のが怖い。

「だ、大丈夫です。」

「本当か？震えているぞ？無理はしなくて良いから。」また、見放される。

「いえ、本当に大丈夫です。だから、おいていかないで下さい。」

その声はあまりに小さく、コウガには聞こえなかった。

ふるふると全身が震える。

(怖い。すべてが怖い。世界が怖い。ああ、私はどうしたら良い?)

マコは多分、無理をしている。それも、相当な無理を。何か、守ってくれるようなところがあれば良いのだが。甘やかしすぎてはいけない。それは分かっている。でも、このままだと、始まる前にすべてが終わる。

「よしー」

「?」こちらを見上げるその目には、うつすらと涙がたまっている。

「ギルドに入ろう！守ってもらうんだ。そうすれば、少しは安心できるだろう?この近くに、ちょうど良いところがあるらしいからな」定番というかお約束のギルドは、この世界にも存在していた。

「ここが、ギルド?」

「はい。」連れてこられたのは、ギルドのイメージからかけ離れた、リゾートホテルとお土産屋さんの併合したモノのような所だった。

看板には、「魔道士ギルド フェンリルブレイブ」と書いてある。あるが。

「間違いじゃねーの?」そう、間違いじゃねーの?感が半端ないのだ。

「いえ、看板にもそう書いてありますし。」そうだけど。そ・う・だけ・ど。もういいや。多分、中身はフツーだろうしな。

「あらいらっしやい。見ない顔だけでも依頼?それとも加入かしら?」出てきたのは、ザ・受付のお姉さんみたいな人。

「加入の方で。」

「はい。私はクロノ。やめたくなかったら、いつでも言ってね。」こんなことを勧誘という人は初めて見た。

「普通はそうだろうけどね、うちは特別な。化け物揃い、てことかな

？詳しいことはマスターに聞いてね〜」「おい、勝手に話をぶん投げおつて、人のことも考えるもんじゃぞい。」マスターと呼ばれたのはよぼよぼのじいさん。でも、元氣は元氣なようだ。「ま、あれじゃの。ウチが化け物と呼ばれるのは「禁式」を使えるモノが複数人おるからじゃ。」禁式？また知らない単語だ。（禁式：禁止された術式。）説明ざつつ・・・。「まあ要するにの、神様が「これは危険ジャー！使用禁止ー！」て言ったもんじゃよ、大昔にな。」そんな「温泉見つけたー！俺のもんだー！」みたいなノリで神様が・・・まあ、言うな。

「それを使えるもんがな、うちにはおるんじゃよ。それも複数人な。」マジか。軽いノリで入ったけどパネーなこのギルド。「それなら、ここはギルドの中でも上位なんですか？」「年に1回、魔道士ギルドの大会が行われる。ここは8年連続で「ゴク、とつばを飲む。」「1位」「最下位」俺の声にマスターの声が重なる。「へ？」全部ここよりやばいって事？何それやばすぎじゃない？世界崩壊しないの？ゲームバランスおかしくね？素人のつくったRPGかよ。ツツコミと？で頭が埋まる。「まあ、理由があるんじゃよ、理由が。」理由？「8年前にそれは始まったんじゃけど、ワシを含む主力は全員10年間眠つとつた。年もとらずにな。」どんだけ寝坊してるんだよ。「同じように、一年に一度「S級審査」がギルド内で行われるんじゃ。審査項目で勝ち抜いたモノが特別な扱いを許される「S級魔道士」になれる。といつても、うちはやんちゃばかりでの。そこのフウマなんかは週に二、三個町を壊しとる。」やんちゃ通り越して破壊魔じゃ？「それでもS級ではない。」それで？S級やばくね？さつきからやばいしか言つてない気がするけど。「S級はそのフェルナがそうじゃが、暴れっぷりではフウマが上での、目付けとか世話焼きをさせとるんじゃが、本人もそう我慢が続かんタイプでな、知らず知らずに、とか巻き込んで国を滅ぼしたくせ者じゃよ。」ええ〜。自信なくなってきたなあ俺。「コウガさん、なんかすごいですね。」その域を飛び出していると思うが。「何故10年間も眠りこけとつたかはそのうちはなすつもりじゃがの、まだそのときではない。ま、最初はフウマとフェルナとお前さん等二人の合計四人で初任務じゃ。」「よっしゃ来たあ！」フウマはすごいうれ

「は、はい。」

「・・・。」

お前らは、知らないだろう。「人を救うこと」が、どれだけマコを苦しめるか。知るはずも無いだろう。その定めに生まれながら、決して相応の能力と言える物を与えられなかった者の気持ちだ。

「これだから、成功者は大嫌いだ。」誰にも聞こえないほど小さい声で言った。

うもれた記憶

雪山の洞窟に着いた。その中は、とてつもなく広い。

「この中にスノーマンがいるって事で間違いないんだな？」

「ああ、そうだ。しっかしこんな時火魔法は便利だな。」

フウマはそう答えて、手のひらにボウツと火をともす。フウマつて、「風魔」じゃなかったんだ。

「はい、コート。フウマはいらないでしょ？」

「ああ、いらん。そんなのあつたら逆に邪魔だ。」

僕は三人分のコートをポケットから引っ張り出した。

「私は良い。二人が使ってくれ。」

「いや、でも寒そうだから。」

断るフェルナを押し切ってコートを着せた。

「でも、薄気味悪いな。いくら進んでも、物音がしない。」

言われてみれば確かにそうだ。自分たちの音以外、何も聞こえはしなかった。

「おーい、誰かいないかー？」

フウマの声は反響しながらあちこちを飛んで、なかなか消えようとしなかった。

周りが薄く白銀に輝く雪と透き通ったつららのみの洞窟は、中から見ればこれ以上無いほどに神秘的だった。

ただ、討伐目的で無ければ、楽しめたのに。あとここまで寒くなければ。

「討伐は、20匹のスノーマン、だったよな？」

俺は二人にきいた。

「ああ、そうだ。そろそろ出てくるはずだぞ？」

フウマがそういった、まさにそのときだった。待っていましたとも言わんばかりに、真っ白なゴリラが出てきた。

「ウホウホ、人間ウホ。リーダー、どうするウホか？」

「ウホホ、隊長様のところまで連れて行くウホ。生け捕りウホよ。」

隊長様つて、普通リーダーの方が上でしょ。どうなってるのかなあ

？それとも、人間と感覚がずれてるのかな？もしくはあちらと。

「何だお前ら、さつきから聞いていれば勝てるようなことを言う。」

フェルナがずいっと一歩前に出た。

「お前らが勝てるかどうか、戦ってみれば分かるぞ？生け捕るどころか、生け捕られるつてな。」

戦いになった瞬間に、急に積極的で、楽しそうになった。

ちなみに俺はというと、スライムのことを思い出していて嫌気がさした。と、マコは。

「はばつ。あひゆう・・・」隣で泡を吹いていた。

「お、おい、マコ！しっかりしろ！しっかりしろつてばー！」

「ああ、川の向こうからコウガさんの声がする。なんで、手を振ってるんですか？」

「勝手に殺すな！起きろオオオオ！！」

俺はマコを首ががつくんがつくと成るくらい激しく揺すった。

「ウホるさいウホ」

「ウホウホ。アホウホね。」

ウホるさいって何だよ。アホウホってなんかめっちゃアホそう。

「おしゃべりはそこまでだ」フェルナが剣を構えた。

「ここは私が相手する。先に行っておけ！」

フェルナの一括で俺等三人は走り出した。

「さて、〔祭〕をはじめようじゃないか」フェルナは奥へつながる穴の前に立ち塞がった。

「まとめて相手してやる。かかってこい！」

「ウホホ。甘いウホねえ。お前を生け捕ってやるウホ！」

リーダーがつららをもぎ取り、フェルナがいる方に向けて投げ飛ばした。

しかし、それはギリギリでフェルナの横を飛んでいき、後ろの三人を刺そうとしていた。

「おっと」フェルナはそれを蹴りで撥ね返した。リーダーの隣のスノーマンが、ほおにかすり傷を作った。

「浮気しないでもらおうか。」もう一度、剣を構えた。

俺たちは、最奥部に向けて懸命に走っていた。

「大丈夫なのか、フェルナは」

「あんな奴に負けるほど弱くねえよ！」

フウマはそう言っているが、やはり心配だ。

「アイツは、何が出来ると言うんだ。」あんな奴に。自信しか持ち合わせていない、「成功者」に。

「フェルナの魔法は、禁式だ。」

フウツと息を吐いて、足に力をためるフェルナ。そして次の瞬間、ものすごい速さでとんだ。

「ウホ!?消えたウホ！」

スノーマンがキョロキョロと辺りを見回す。その後ろに、フェルナが背を向けて立っていた。

「瞬間移動ウホか?でも残念だったウホね!おいらは無傷ウホ!」

フェルナは、不敵に笑うと天井を指さした。

「上を見てみな。」

「うほ?」

リーダーの上には、先ほどまで隣にいたスノーマンがめり込んでぶら下がっていた。

「〔禁式〕リダクシヨン・ギア。自身の周りの時の流れを減速させ、さらに全能力を極限まで引き出す。素でも強いやつがそんな物使ったら、大抵の敵は吹き飛ばせるよ。」

リーダーは、取り残される形となった。

「う、ウホホ・・・そ、その先ほどは、大変失礼しました。」

リーダーが逃げようとする。

「そうはさせないに決まっているだろう?」

剣を片手に、ゆっくり近づいていく。

「うひー!」

ついに、背を向けて走り出した。

「ディゲムブレッサー!」

「うほひ・・・」

リーダーのからだは、バラバラに切り裂かれていた。

フェルナはあたりを見渡した。「雪山ー」

(戻ってこい！おい！)(汝に力を授けよう)(疲れた。疲れたよ)

頭の中で、とぐるを巻くように思い出がぐるぐると回り始めた。

(おお、お前さんみたいなちびっ子が、また増えるのか。そなたの名は何という？)(ーフェルナ。)

フェルナは唇をかんだ。「もう二度と、あんなこと。」

「さてと」

俺たち三人は、もうすぐ最奥部というところまで来ていた。マコはようやく目覚めて、隣で震えている。

「行くぞー！」フウマの合図で二人はなだれ込んだ。ん？二人？

入り口を見やると、マコが震えている。

「ああうあああああうあう」

えく。やつぱり、こういうところでキまらないんだよな。

「何だお前達？」中には、スノーマンがぎっしり。

「答える。しばらく前に、ガトーって言う男が来ただろ？」

スノーマンはニヤニヤ笑っていた。

「ウホホ、知らないウホね？」

「知らないウホね」

「そうか」フウマはそう言うと、一番近くの一匹をいきなりぶつ飛ばした。

「これでもか？」

スノーマンの間に、ぎわめきが走る。

「お、お前、人間ウホよね？」

「そうウホでござる」

こいつ、口調がめちやくちやだ。

「ウホウホ、ゴリラだけに吠え面かかしてやるウホ。」

顔の上下を両手でかくあの仕草をしながら、フウマが挑発する。

「それはこっちの台詞ウホー！」

一匹のスノーマンが飛びかかってくる。

「うおらあー！」フウマの拳が腹をめがけて飛んでいく。

「と見せかけて」

「は？」

前のスノーマンが横に移動し、後ろから別のスノーマンが出てきた。

しゃがんだ状態から足をバネにして、フウマに飛びかかる。

「うおっ」とつきにガードの体勢になるフウマ。

「二と見せかけてからの？」

今度は横から腹を殴られた。

「うはっ！」フウマがかなりの勢いで吹っ飛ぶ。

「だーもう、こぎかしいんだよ！ゴリラのくせしてフェイントかけてくるんじやネー！」

「ごもつともで。下手すれば、フウマより頭良いかもしれないなこいつら。とか思いながら。」

「うっほっほ、まだまだウホね。」

スノーマンの中でも一番重そうなのが前に進み出てきた。

「どウホするっすか、こいつ？」

「おで、男、嫌い。女、好き。ソイツ、男。いらないうほ。」

「りよウホかいッす」

ジャンピングプレスをかまそうと、スノーマンが飛び上がる。

「よける！」

「ウツホッホ！」

氷に、体がめり込む。

「袋ウホ！」

俺はポケットから妖刀を引っ張り出した。

「うらあ！」

スノーマンはぴよんと跳んでよけた。

「ウツホホ、そんな大ぶり当たらんウホよ」

くそ、どうすればいいんだ。

「ウホホふおう！」

「だーもううっとおしいんだよお前らあ！」

全身から炎が噴き出し、スノーマン達を丸焦げにした。ええ、マジでか。

「あとお前だけだ」

隊長は取り残される形となったわけで、一瞬だけぼかんとしていたが瞬時に状況を判断した。

「わ、分かったウホ！取引ウホ！人間は返すから、命だけはご勘弁ウホ！」

「お、なかなか物わかりが良いじゃねえか。どこにいるんだ？」

土下座の体勢から起き上がると、今度はペコペコしながら手で示した。

「こ、こつちですウホ。」

フウマが、言われたとおりに進む。

「どこだ？」

そこには、どうやら天然の窓があるようだった。

スノーマンが、にやりと笑う。

ー罨だ。

俺はそう直感した。

「下がれフウマ！」

「え？てうわっ！」

フウマが突き落とされる。

「フウマー！」

俺は窓に駆けつけた。そこが見えない。深い闇だ。

「おで、男、嫌い。女、好き。デュフェフェデュフェフェフェフェフェフェフェフェフェフェ。ウホ。」

そんな、こんな序盤で。

「ずいぶん長くて、迷ったかと思っただが、ここで間違いなさそうだな。」

その声に振り向くと、フェルナが立っていた。

「ウホホ、女が増えたウホ♪」

フェルナはあたりを見渡した。「フウマは？」

「アイツに、突き落とされたんだ。」

フェルナはちっとも驚かなかったし、焦りもしなかった。ただ一言、「そうか。」とだけつぶやいた。

「なら、お前が敵だな。祭をはじめようじゃないか。」

祭？何を言っているんだ？仲間が死んでも、ショックじゃないのか？
？これが、—これがギルドなのか？

慌てふためくマコの方が、まだ仲間らしい。やっぱり、成功者なんてそんなものなんだ。

コウガの叫び

「さあ、祭をはじめようじゃないか。」

祭？祭だと。人が一人死んでいるんだぞ？お祭り気分が良いわけがない。それなのに、こいつらはー

「大丈夫、コウガならば死んではないよ。昔っからそうなんだ、死んだと思ったら急にけろりとして帰ってくるんだ。」

こちらの気持ちを察したのか、フェルナはそう語りかけてきた。しかし、その話の根拠はどこにもないことぐらい、分かっている。少なくとも、目の前にはそんな物はない。

「あ、あの、この高さじゃ、無事じゃすまないと思うんですけども、その、皆さんは体がお丈夫だったり？」

悪意のないことを知っていれば単に驚いているだけに聞こえるが、知らなければ嫌みに聞こえるんだろうな、と思うような台詞をマコが吐いた。

「ああ、その中でも特にアイツは頑丈だ。銃弾で撃つても傷がつかないくらいにな。」

「ほえ〜」とマコが感心しているのか驚いているのかよく分からない声を口にした。

マコの震えを見て、思った。絶対、寒いだけじゃないだろう、と。スノーマンも怖いだろう。雪山も怖いだろう。でも、それ以上に自分より強い人間がたくさんいることを突きつけられて、怖がっているのだ。

何かしなくては、励ましてあげなくてはとは思ったものの、そんな言葉は到底思いつかなかった。ただ、肩に手を置いて、「大丈夫、大丈夫。」とバカみたいに繰り返している自分がいた。全く、情けないな。（大丈夫。コウガさんもそう言っている。なら、大丈夫。大丈夫。ここまで、どうにか頑張ってきたじゃないですか。この剣を抜くことはありません。目覚めさせる必要はありません。きつと、きつと。大丈夫、大丈夫。）

何度も同じ言葉を繰り返していた。それしか考えないようにした

かった。全員生きてかえって、祝われたかった。

生まれて、はじめてかもしれない。歓迎されると言うことを考えるのは。いや多分、生まれた瞬間は歓迎されただろう。だが、覚えていないので意味がない。

(何で、こんな思いまでして、勇者の子孫は私なのか。墓一つ守れなかった私なのか。コウガさんや、フェルナさんや、フウマさんじゃなかったのか。マスターさんじゃなかったのか。何故、私でなければならぬのか。それが私にはわからない。)

「さあ、かかってくるがいい。好きなだけ、殴ってみろよ。」

その声で、マコは目を開いた。

「ウホホ、おで、女、好き。お前、殺さない。」

「殺せないの間違いだろう?」

「ウホホ、ウホホホホ。おで、お前、倒す。土下座、させる。そして、嫁に、とる。」

「おっと、ソイツはいくら何でも願ひ下げだ。」

フェルナが身構えた。言葉に対してか、スノーマンに対してか。

「たたつ切る!」

フェルナが通ったと思われるあとに、血が飛散した。速すぎて見えなかったのである。飛び散った血が、フェルナにもパタパタとついた。

「ウホあ・・・」

「フン、身の程をわきまえんからそうなるのだ。」

スノーマンは笑っている。何か、怪しい?

「なーんてウホ。」

その場にいた全員が凍り付いた。

「どういうことだ?」

「血糊袋、という奴ウホ。毛の下に敷き詰めてあったウホ。白いから、分からなかったウホね?」

こいつ、本当に賢い。もしかしたら、人間よりも賢いかも。

「おでは頭脳で雪山の大将になったんだウホ。落ちてった筋肉バカと一緒にするなウホ。」

「なら、もう一度切るだけだ。」フェルナはそう言ってはじめて、自分の体が動かないことに気が付いた。

「おい、どうなっている？」

「血糊が凍ったんだウホ。アンチマジックをかけてあるから、それだけ浴びれば何も魔法を使えないウホよ。ついでに、脱力の呪いも入っているウホ。」

こいつ、すべてを分かっていたかのような戦い方をしやがる。

スノーマンが刀を取り上げた。

「土下座も出来ないウホね。しかたない、こつちを嫁にとるウホ。」

スノーマンはマコに向き直った。

「え？え？」

「背も小さくて胸も小さめウホが、それがまたかわいいウホ。」

「え？え？」

マズいな。俺等二人ではどうしようも出来ない。俺の剣は当たらない、マコはそもそも剣を抜かない。何故そう頑なに拒むのかは知らないが。

しかし、二人が闇雲に突っ込まなければ。もっと考えられる人間だったなら。こんなことにはならなくてすんだはずなのに、それなのに目の前で現実問題二人は死んだも同然だ。守ってくれるはずではなかったのか。そんな力もなかったのか。

(サア、イカレ。オマエノイカリヲトキハナツンダ。)

聞き覚えのある声が出た。鬼だ。鬼の声だ。

地面がビリビリと震えるように感じた。いや、本当に震えている？

「何ウホか？」

良く耳を澄ませば、何かか聞こえてくる。

(おゝ→まゝ→→えゝ→→)

その「音」は地獄の底から聞こえるかのように、腹をビリビリ震わせた。

「ゴオツ→ソオオオオオオ←!!」

フウマだった。地面から飛び出る人間とは、怪奇現象だった。モグラなら飛び出しまくるけども。

口からシュウシュウと湯気を吐きながら、フウマがにらみつけた。「突き落としやがってこの野郎！お返ししてやる！」

「どういうことだ？あの高さから落ちて、こんなにピンピンしている。しかも、あの湯気。まさかとは思うがな。」

「どうやって上がってきた？」

「食い進めてトンネルを作った。」

「大丈夫か？」

「ああ、見ての通りピンピンしてる。」

「いや頭」

俺の声も、どうやら届かなかったらしく、すぐに戦闘が始まった。

「うほー！」

つらら針が次々と投げられる。

「効かーん！」

つららが当たった瞬間蒸発する。

「わははどうだーっ！」

「う、ウホ。」

スノーマンはキョロキョロして、フェルナの刀を見つけて拾い上げた。

「ウホ」

「あ、それは痛そう。」

「ウホー！」

刀をめちやくちやに振り回しながら突進してくる。

「ぬん！」

フウマは、まさかの真剣白刃取りをした。

「心配するな。アイツも禁式の使い手だ。」

フェルナが俺にささやいた。

「破邪の者、鬼を滅し者。その皮膚鬼のように頑健で、その腕鬼のように力強く、肺には炎と怨嗟をため、鬼の力をもって鬼を葬る者なり。殺鬼の法人「オーガスレイヤー」、またの名を」

俺は、次の言葉を疑ってしまった。

「魔物狩りの「モモタロウ」だ。」

桃太郎？桃太郎だと？それで、刀に激おこぶんぶん丸なんてふぎけた名前がついていたことがようやく腑に落ちた。

(他にも、外界の者がいる。それも、同年代の人間で、同世界の可能性が高い。)

もしも、会えるのなら会ってみたいがな。

(アエルサ、カナラズ。ソレガキミノサダメデ、ソシテカノジョノサダメダ。タダ、デアツタトキ、オマエハドウオモウコトヤラ。)

鬼は、知っているというのか？大体、いつの間に入ってきたんだ。

(マスターナラワカルカモナ。ソロソロネムルサ。カノジョトハ、シバラクブリナノデナ、ヤツレルワケニハイカナイ。)

その「彼女」って誰のことなんだ？

鬼はどうやらもう寝たらしく、返事はかえってこなかった。

「ウホホ、ホー！」

スノーマンが吹っ飛ばされて、その断末魔で俺は元の世界に帰ってきた。

雪が溶けるように、蒸気をあげて小さくなっていき、やがて人の姿となった。

「どうだ、フェルナ？」

「行方不明者の特徴と合致している、間違いないだろう。」

フウマは、彼を背負って山を下りはじめた。

俺は三人のしばらくあとをついて行った。

「どうした？」

フウマが振り向いて訪ねてきた。

「俺なあ、最初、お前らに対して「出来る奴に出来ない奴の何が分かるんだ」って思ってたんだ。せいぜい調子こいてへましていたい目に遭えばいい、そう本気で考えてたんだ。でもな、」

俺はいったん息を吸い込んだ。

「気づいたら、フウマ、お前の名前を叫んでた。叫んじまってたんだよ。しかもご丁寧に、お前の安否すら心配してた。」

マコが、信じられないという顔で凝視してきた。

「どうやら、根っからの悪人になれるほど、根性も覚悟もないみたい

だ。俺は、情けないな。」

「ま、根っからの悪人になれるほどの奴だったら、いれないだろ普通。」

そうか。それもそうか。

「こ、コウガさんはやっぱり優しいんですよ！自信もって良いんです。」

俺は、長いため息を吐いた。

「ありがとう、マコ。そう言ってもらうのを、期待してたのかもな。」

俺は歩くスピードを上げた。

短命の英雄と剣の真価

「どうじゃった、禁式使い共と組んでみた感想は？その二人は特に悪ガキで、まあ、盛大に暴れたじゃろ。」

氷を食い進めたと平然と言ったフウマの顔を思い出した。笑いそうになるのを必死にこらえて、「はい、それはもうとつても。」と返しておいた。

「まあ、敬語はとりなさい。家族みたいなものと考えたらええけんのお。」

「そうだけ、コウガ。じつちゃんは仲間甘いんだよ。」

「お前の悪事は、絶えんがな。おかげで国際ギルド連盟からも苦情が絶えん。」

フウマはピースを突き出した。「エへへ、すげーだろ！」

「いや、すごいけど。」そういうすごいさは持たない方が良いと思う。

「人型の魔物を殺す、これをやっておかないと死亡率が格段に跳ね上がるので、最初にやらせるんじやよ毎回。」

初仕事がいきなり討伐だったのはそういうことか。

「ま、それでは二人には「職業」(ジョブ)についてもらおうかの。詳しい説明は、クロノからしてもらおう。」

ひよこつとクロノが現れた。「はいはくい、簡単に説明するね。職業はどれを選んだかで能力的な変化がっていくの。どれが伸びやすい、どれが伸びにくい、こんなことが出来るようになる、とかね。その人の適性みたいなのもあるから、一概にどれが強いとは言えないわね。」

現世のゲームと同じ感じか。

「とりあえず、その水晶に触れて。何があつてるか分かるわよ」

「これ？」「そう、それ。」紫色で古めかしくなかなかについ水晶だ。

握るように手を置くとモニターみたいなのが出てきた。

「上から順に適性が高いから。」

そう言われて一番上を見ると、「召喚術士」と書いてある。他にも、魔道士や剣士なんて王道から、盗人、刀職人、植物鑑定士とかあんな

り聞かないようなものもある。

「召喚術士って？」

「文字通り、魔物を召喚して使役するの。最初の一体と保健用の召喚カード五枚が支給されるわ。お値段高めの5万ゴールドとなってるけどね」

金がいるのか。

「ただより高い物はないって言うでしょ？それに活動費や人件費、連盟加盟費なんかで何かと出費がかさむのよ。」

「あと、苦情に対するわび賃と器物損害の弁償が全体の三分の二くらいいるがな。」

大丈夫なんだろうか、本当に。間違ってるよな？大丈夫だよな？な？

「まあ、それでもやっていけるだけもうかつとるという事じゃ。心配せんでええわ。」

「あの、さっきから気になってたんだが」

「何じゃ？」

「どうして心を読めるかのように会話が出るんだ？」

「読めるからじゃ。」

マジでか。え、てことは全部筒抜け？

「そうなるの。ま、しばらくはその二人と行動してもらおう。それなら安心じゃろ」

本当に読めているようだ。それはそうと、一つ心配なことがある。

「マコ、お金ある？」

「ないです。」

だろうね。

「後払いでも良いわよ。ローンも可」

いや、五万円（て言う感覚で良いのか分からないけど）をローンはさすがに惨めな気がする。

「なら、後払いじゃな。」

「じゃあ、今度はお嬢ちゃんね。」

マコが恐る恐る手を伸ばす。「勇者」のみ表示された。

「ほう、勇者の血を引く者か。」

「心が読めるのに分からなかったのか？」

マスターはふるふると首を振った。

「そやつの頭の中は、「怖い」ばかりがあつて他の感情まで読み取るのは困難じゃ。」

マジか。マジですか。

「特に、何が怖いんだ？」

「蛇と、雷……」

うーん、蛇と雷が怖い勇者ねえ。

「何で蛇が怖いのか？」

「だって怖いじゃないですか！真っ白でニユルニユルつてなつてガブウですよ！」

「じゃあ雷は？」

「怖いじゃないですか！ピカツてなつてゴロゴロつてなつてズドーンですよ！」

うーん、うーん。先行きが不安すぎる。

「とりあえず、四人で依頼を受けたら？勇者は無料だから登録できるけど、召喚術士は日がたつにつれて高くなるわよ。これが道具一式ね。」

紫の布をわたされる。

「じゃあ、四人で一人五万以上だから二十万前後の仕事な。」

ビリッとボードにとめてあつた紙をフウマが破り取る。

出て行こうとしたときだった。

「おぬし、マコといったな。」

「はい。」

「おぬしはタケルじゃ。」

タケル？タケルと聞いてまず思いつくのは武神だ。

「ずいぶん褒めるじゃないか。どういうことだ？」

一升瓶の底にあつた酒をグビツと飲み干すと口を拭きながら言った。

「今はまだ、知らん方がええわい。」

俺たちが言った後、こんな会話が交わされた。

「全く、最近の若いもんは言葉もろくに知らんのか。タケルとは、強すぎたが故に短命の英雄となる者じゃ。」

「やはり気づいてたんですね。彼女の剣が本物であること。」

「うむ。マコか……奴は異端じゃ、忌むべき者じゃ。」

「蛇と雷。剣の主、破壊せし者。しかも、もう一人のコウガはー」

口調に強い哀れみが混ざった。

「因縁の、鬼をー鬼を中に飼っている。彼もまた、タケルであり、忌むべき者であり、強い闇を有する者。」

マスターはとんでもない二人だとも言いたげに見つめた。

「その闇が見えんのが問題でな。よほど深くにあるらしいのじゃ。消えやせんだろうの。」

「神代（かみ）の世の悲劇が、起ころうとしている。」

マスターは誰もいない扉を見た。

「今はまだ、自覚がないからの。成り行きしか無いわい。ワシが心配なのは、そのことじゃ」

「ところで」クロノは依頼ボードを見た。「例の依頼は？」

四人は、今度もまた討伐に向向っていた。

「お前、もっと無かったのかよ」

「あつたよ。もつとおいしいのが。でも討伐じゃないと俺もフェルナもつまらんし、お前も自分の力が分からんだろ」

そうだけど。隣でずっと震えているマコを横目に見ながら、ため息をついた。

「もうちよつと他人を思いやった方が良くぞ。」

「一人のために、三人を犠牲にしろって？その方がわけ分からんだろ」

「そうはいつてないだろ」

「言ってるんだよ」

フェルナはマコの方を見た。

「安心しろ、雨雲は無い。雷は来ないさ」

「春だから蛇はいるけどな」

余計なことを言うな、とでも言いたげにフウマの方をにらみつけ

る。

「ま、契約には倒すのが一番早いんだ、どうせ。いつかは討伐にでないといけないかったんだよ。」

「どうやら、召喚術士は契約しないと召喚できないらしい。」

「そのカードは強力な魔物を1度限り無料で呼び出せる。その時自動的に契約されるが、次からは魔力が必要になる。かなりの強さだからな、消費魔力が高い。なりたてにはホイホイ呼び出せないんだ」
なるほどね。よく考えて使え、と言うことか。

「ところで、何の討伐だ？」

「バル・ファウプラデス」

「フェルナが目を見張った。」

「馬鹿か！あの依頼を受けるなど！」

「どうしたというのだろうか？」

「五年間、誰もクリアしなかった依頼だ。二十万で良いはずだぞ」

「いや、ほら二十」

「そう言っただけ焦ってきた紙には、確かに二十の文字。」

「億じゃねえか」

「え？マジで？」

「おいおい、大丈夫かよ。」

「ヒトサマの縄張りで、何をしゃべくっているんだ？」

「そう言っただけ現れたのは、かなり大きく特殊な見た目をした蜘蛛。」

「雲は出なくても、蜘蛛は出たな」

「のんきすぎない？」

「さつきあれだけ焦ってたくせに。」

「もう仕方が無い、狩るぞ！」

「フェルナが剣を構える。」

「リダクシヨン・ギア！」

「フェルナが突っ込む。」

「タイム・アクセラレータ」

蜘蛛が急にもものすごい速さで動いて、フェルナを前足の鎌で切った。

「遅い」

「鬼炎掌！」

今度はフウマが燃える拳で殴りにかかる。

「フアントム」

ユラリと揺れて、その体を拳がすり抜けた。

「何!？」

「きゅきゅっ♪」

上から蜘蛛の声が出た。鎌を構えて降りてくる。

「鬼炎爪！」

またゆらりと揺れる。

「きゅうう〜！」

あつという間に二人は倒された。

「早くしないと、毒が二人を殺すぞ？」

毒までもってるのかよ。

「マコ、剣を抜け」

「え、でも」

「良いから抜け！全員死ぬぞ！」

(全員、死ぬ？私のせいで？いやだ・・・怖い。)

「分かりました。」

マコが剣を抜く。その刀身は月の色にうつすらと輝いていた。

雨雲が空を覆う。雷が落ち、木を、草を燃やし始める。その一つが刀に落ちた。

雨が降り始め、突然刀は持ち手を残して蛇となった。

純白の体、紅の宝玉のような一對の瞳。縦に黒筋が走り、チロチロと覗かせる舌は燃えるように赤い。

蛇は大口を開けると、蜘蛛を丸呑みにした。

くるりとこちらを向き、今度はマコに襲いかかる。

「ひいー」右肩の肉を抉られ、マコは気絶して刀を取り落とした。その瞬間、大蛇は消えた。

「嘘だろ・・・これが、大蛇ノ剣。勇者の力が、こんな醜いはずが無い。」

俺はマコでは無いのに、気が付けばガタガタと震えていた。

神代（かみ）の世と呪われた力

「これが、勇者の剣の力・・・」

体中がガタガタと震えている。どうしてもおさまる気配は無い。

「すさまじいな」横で声がーあれ？全員気絶してなかった？

横に二人が立っていた。

「お前ら、気絶してなかった？」

「いや、滑って転んだだけだ」

「私はバランスを崩した」

ええ・・・

「おい、緊急看護班いるか？」

「今は私以外は留守よ。どうしたの」

クロノが受付席から出てきた。

「ひどい怪我じゃない。もしかして剣を抜かせたの？」

えっ？どういふことだ？

「何でそのことを知ってる？」

「まあ、マスターと私だけ、気づいたのよ。この子の正体。」

「正体って？」

手際よく治療しながら、クロノはその言葉を口にした。

「勇者の子孫なんですよ。分かるわよ」

「えっ？」

「うむ、その異様な魔力を見ればな」

奥の部屋からマスターも出てきた。

「聞いてたんですか」

「まあ。そんなことはどうでもええわい。よっと」

マスターはテーブルの上に飛び乗った。

「おまえさんは神話をしつとるか？」

「神話？」

「そう。この世界が出来る前、いや、正確には『この世界がこの世界になる』よりもずっと昔の出来事を綴った、それはもう壮大なおとぎ話の事じゃ」

「この世界がこの世界になる前？おとぎ話？マスターの言葉は荒唐無稽でてんでバラバラだ。」

「おとぎ話を聞いている暇は無い。そんなことより大事なことが目の前にあるのに」

「まあ、そういうな。物語を野原にほっぽり出したらどうなる？どこでどう暴れるのか、わからんではないか」

確かに、その通りだ。俺は諦めて、黙って聞くことにした。

「それは昔、どれほど前かも分からないほど昔の事じゃ」

マスターは、おとぎ話をはじめた。

まだ神々が平気な顔で地上を歩いていた頃。『神代』と呼ばれる時代に、偉大なる人物がいた。名前は男神『輝日大神』（かぐひのおおかみ）と女神『月暗の大神』（つきくらのおおかみ）の二人じゃ。

二人は幸せじゃった。その日が来るまでは。

二人の末の子である大蛇は体に高熱をまとっておるため、生まれる瞬間に母親にひどいやけどを負わせてしまった。もちろん父は怒り狂い、大蛇を切り捨てた。

するとどうじやろう、大蛇の血をたっぷり浴びたその剣は、大蛇の力と感情を宿し、怒りにまかせて暴れはじめたではないか。母君ばかりを愛しておって、息子はどうでもいいのかと涙を浮かべながら訴えた。その剣は泣きに泣いた。涙は雨に、叫びは雷となり、海を作り嵐を起こした。やがてその剣は『大蛇ノ剣』と呼ばれるようになる。

その一方で、母である月暗の大神は、療養のために地下にこもろうとしていた。しかし坂を下りる途中でふと思いついて、四人の我が子の依り代を作った。その後洞窟の入り口を岩で塞ぎ、そのまま出ては来なかった。

四つの依り代に、一つずつの魂が入った。真っ赤に燃えていた地上は、大蛇の涙で巨大な岩と化していた。そこに四振りの刀が突き刺さった。そのうちの一つ、叔父の『鬼碎ノ獄』はまだ一つだった岩を七つに割った。その姉に当たる『破天丸』は風を作った。双子の姉の『夜叉ノ太刀』は命を生んだ。長男の『髪斬』は死と生き返りを生んだ。そして、四刀は大蛇を押さえにかかると。

それからかなりたった頃、地上には、神を信じん者さえいた頃。あるところに、一人の男がおった。男は生活状況が悪くなる一方の中で、どうにかして改善できないかと考えておった。そこで、好きなときに好きな物を空気や水、大地の中から取り出す装置を作った。目に見えないほど小さく、周りの物からエネルギーを吸収し、自分で自分のコピーを作るため、ほぼ永久的に使用できる。人々はそれを「魔法」と呼んだ。そして、回りからエネルギーを取るためスタミナのことを俗に「魔力」と呼ぶようになった。じゃがその世界は長くは続かなかった。集まりすぎたエネルギーが爆発を起こしたからじゃ。そのときのエネルギーで宇宙の外にまで機械は飛び出し、時間軸がずれてあり得ないスピードで時が進み、次元軸がずれて二つの世界が融合し、それぞれの世界で同じ役を担っていた者同士がとけあつて一人となった。ただ二人を除いて。その一人が『大蛇』じゃ。向こうの大蛇は人であった。溶け合う人はおらず、かといって剣には先客がおる上に溶け合うすべを持っておらなんだ。このままでは、魂だけになってしまう。そんな大蛇の前に、ある人物が現れる。

それが、初代の勇者じゃ。名を「ティアズ」、彼女は向こうの世界に存在せんかった。何故なら、彼女は女神の生まれ変わりだったからじゃ。勇者のことをたまに半身と呼ぶ者がおる。半分だけ人、という意味での。半分神の人間と半分神の人間、それが溶け合つて合わさつたのが勇者じゃ。元々大蛇でありその母であるのだから、大蛇ノ剣は喜び舞いあがつた。しかし大蛇は、愛する者ほど傷つけるという自分の本性を忘れておった。抱きついたときに力の一部が漏れ出た。彼女もまた、愛する者ほど傷つけるようになってしまった。命を慈しめば触れた草を、草に触れた鹿を、しかを追いかけるライオンを二つに裂いてしまった。水をいたわれば川を、海を引き裂いた。愛しい半身にして我が子の大蛇は、触れないと出てこれないのに、触れると傷つけてしまった。それを見た人々は、恐れ、おののき、こう呼んだ。『異端者』と。

マスターの話は、そこで終わった。

「つまりソイツは、破壊をもたらす者じゃ。異端者じゃ。勇者にして、

たたえられるべき者にして、また、忌むべき者じゃ」

「この力は、どうやったら操れるようになる?」

「簡単じゃよ。大蛇を飲み込め。飲まれることで、飲み込め。牙を外に出してはならぬ。体の内に牙を持て」

「飲み込むとはどういうことだ?」

「もちろん、物理的ではない。マコよ、おぬしが、『牙の主』となるのじゃ。また、ソナタはすでに牙を飲み込んでおる。身に覚えは無いかね?」

牙の主?俺が?すでに?」

「妖刀なら、たしかに触った。でも、契約は交わしていない」

「触れられたと言うことは、気に入られたという事じゃ。レガリアは、主の血筋が途絶えるか、主を見限ると、新たな主を探し出す。ソイツはお前さんを気に入ってたんじゃ。レガリア鬼碎ノ獄。身体のみではなく、魂や炎と言った物まで腐らせ打ち砕き破壊する。代償として、主には鬼が宿る。身に覚えは無いかね?」

鬼?じゃあ、やはりあれは妖刀なのか?いや、違う。妖刀と出会う前から、あいつは俺に話しかけてきた。確かはじめて握ったときは「はじめて握ったとき、人型の魔物を切ったんだ。そしたら、全然胸が痛まなくて。全身に窮屈なよろいを着けたような圧迫感があつて、体が火照つて、勝手に動いて。比喻では無く、本当に勝手に動いて。それでどこかー開放感があつた。楽しいときえ感じていた自分がいた。ゾクゾクして、たまらなかつたんだ。身震いが止まらなかつた。寒さのせいじゃない」

「それは鬼じゃ。鬼がお前の体を動かしたんじゃ。そいつが気に入るのは、心の中に深く大きい悩みを持った人間のみ。お前さん、ここに来る前、一体何があつたんじゃ」

脳裏によりみがえる光景。気からぶら下がる人影、泣きじやくる小さな女の子、部屋のカーペットに大きく書かれた「あ」の文字。

「今は、まだ・・・話したくない」

俺は、まだ傷が癒えきっていないことに気づいた。馬鹿だな、全く。あれからどれだけたつたと思ってる?そろそろ、こんな感情風化して

しまつて良いはずだ。そうあつてほしい。

「そうか。ま、どうせここはそんな奴のためのギルドじゃ。そのうちでかまわんよ」

マスターは瓶底に残っていた酒をラツパ飲みした。

「それはそうと、今はマコのことについてじゃ。この力は使うべきか、使わないべきか。ワシは出来れば使わんでほしいがな」

「俺も、そう思う。マコにはまだ、人間でいてほしい。」

「俺も賛成だ」

「何を言っている？力を持ちながら使わないのは、悪だ。邪悪とおんなじだ。魔王共と同等になれというのか？仲間ではないのか」

フェルナだけが、反対した。

「私は、どっちでも良いけどね。本人の意思を聞いてからじゃない？」

マコが、ちようど目が覚めたようだ。

「あの、ここは？私、あれからどうなつて？」

「マコは、どう思う」

「へ？ギルド？気絶してた？それくらい自分で考えろつて事ですか？」

「違う。力だ。使いたいか、使いたくないか」

マコは、すべてを察したような顔をした。少しためらいながらしゃべりはじめる。

「出来れば、使いたくないです。誰も、傷つけたくない。でも、使わないと、何一つ守れない。だから、あの子を手なずけたいんです」

マスターははあとため息を吐いた。

「今ちようどそのことについて話しておつた。手なずけるのは無理じゃ。神じゃからの。その力を扱うためには、おぬしが大蛇の『牙の主』となるほかは無い。そのことを考えておくれ」

「で、でも、どうやつたらなれるんです？」

マスターはにいと意地悪い笑みを浮かべた。

「古典にはこう書かれておる。『名を捨てよ、おのれを捨てよ。名も無き者に名前無し、名の無い名の無い扉を開け。扉の鍵は勇者なり、扉の上は龍となり、そなたの助けとなるであろう。おとぎ話のヘンゼル

とグレーテル、像を釜にくべるだろう。これは遠い予言なり、真実は謎を解け』と。ここはノーキンばかりでの、お前が真実にたどり着けるかどうか」

「必ず、たどり着きます」

不思議と、力がこもっていた。

雪の町に潜む影

夢を見た。いや、正確には、見ている夢の世界にいた。おそらく俺の意識の中なのだろう、映画のフィルムに貼り付けられた俺の記憶の断片が、そこかしこをうっとうしく飛び回っている。

そして、目の前には、俺がいた。派手なシャツを着て、サングラスを頭に引っかけているが、間違いなく俺だ。

「誰だ？ いや、何だ。おまえは？」

「知っているくせに。おまえは、すでに知っているくせに、何でそんなことを聞くんだ。おまえ、大丈夫か？」

「・・・俺か？」

「おいしいね」

「おいしい？」

「そう、惜しい」

俺は・・・いや、男は目を輝かせながら言った。

「私は鬼だ。おまえの言う、な」

鬼？あの鬼か？あのと時話しかけてきた・・・

突然、相手がその姿になった。やっぱりか。

「違う違う、この鬼じゃない。私は刀の鬼だ。本当は神だが」

そう言われて思いつくのは、妖刀だけだ。

相手が、刀になる。

「そうそう、それであってるよ」

面食らってる俺におかまいなしで話を進めようとしている。

「おまえに、言っておこうと思うことと聞いておきたいことがあつてな。それでおまえの夢に現れた。私は今、おまえの内側にいるからな」

刀がしゃべっているというのはなんだか笑いたくなる。奇妙で、不気味で、とんちんかんだ。逆立ちしてコマみたいに手のひらの上で回されているかのようだ。とにかく、気が狂いそう。

俺が相手を元の姿に戻すと、わかってたともいうように薄ら笑いを浮かべた。

「まず、言っておくことがある。さつきも考えていた、あの鬼は私ではない。別の何かだ」

「別の何かって、それじゃあ、はっきりとはわからないんだな？」

「そうだ。ただ、あいつは異質だ」

「それくらい、見たらわかる。あんな見た目の・・・」

「違う、そうじゃない。そういう話ではない」

じゃ、どういう話なんだよ。

「人は普通、いや人程度以上の知能を持つ生物は、憎しみを受け入れない。自分のものではないと拒否し、拒まれた憎しみはやがて寄り集まって一人歩きを始める。憎しみを持つているというものは大抵、何かの拍子にふらりと帰ってきた自分の分身(ダブル)を見てそれを自分と言い張っているだけのことだ。それがあいつは、喜びとか、そういう『正の感情』を一人歩きさせていた。心の底から拒んでいると言うことだ。それは容易なことではない」

憎しみ。じゃあ、俺が持っている憎しみも、持っていると思っ込んでるだけ？

「そういうことだな」

どうやら心が読めるらしい。まあ、当たり前か。心の中にいるんだから。

「あのマコとか言うやつも、憎しみを持っている。そしてそれはすでに一人歩きを始めている」

そうだ、マコのことでも聞きたいことがあったんだ。

「あいつは運がいいはずなのに、ここまですつと不運だ。なぜだ？」

「いや、運がいいよ。あいつは運がいい」

「なんで？あんな目に遭っているのに」

「あんな目に遭っているからだよ」

どういうことだ。将来のためだとか言うのか？

「いや、違うね。よく考えてごらん」

「なにを？」

「あいつは勇者という誉れ高い家系に生まれた。故に苦悩を持った。あいつは大蛇に愛された。故に傷つけられた。あいつはおまえに出

「いや、待たん！ダイビングプレス！」

腰の痛みで目が覚めた。ここはギルドの寮だ、間違いない。そしてこの声はフウマだ。

「いってえな。何だよ？」

「出かけるぞ、着替えろ！」

「は？」

「買い出しだ、ついてこい」

その日は、雪が降っていた。向こうは夏が終わるか終わらないかという時期なのにな。

通りは活気がありで賑わっていた。いくつかの買い物物を済ませ、帰路につく。

「お前、よくそんな持てるな」

「コツがあんだよ、コツが」

「そーいや、二人になったの初めてだな」

「お前・・・」

フウマがこちらを見る。

「告白か？」

「何でだよ」

すると、黒い影が通り過ぎた。

「何だ、今の？」

俺は腰に手を当てた。うん、ないね。

「スリだ。うまい具合にかかってくれた」

向こうの方でぎゃつと短い悲鳴が上がった。

そちらに行ってみると、網が絡まった状態で少年がピチピチはねていた。打ち上げられた魚みたい。

「さてと、少年よ、残念だったな。俺は財布を持ってないんだよ。遠くにあっても、取り出せるからな」

「・・・」

突然動きをピタリとやめ、こちらをものすごい形相でにらんでいる。

「顔に泥がついてるな、これじゃ誰かわからん」

そう言うとフウマは進み出て、ハンカチで顔を拭こうとした。

「おい、やめろ。汚らしい汚れた手で触るんじゃない」

「お前の顔の方がよっぽど汚らしくて汚れてるよ」

顔をかなり強めにゴシゴシとこする。うわあ、痛そう。

何か言おうとしていたが息ができなくて言えなかったという状況から解放されると、少年は再び悪態をついた。

「くそつたれ。顔なんざどうでもいいんだよ、そんなことするぐらいならこの網をほどきやがれ」

「そいつは無理だね。盗人はタイホされるって、母ちゃんに習わなかったか?」

「あいにく、俺は捨て子でな。ろくな教養をされずに、性格が曲がったから、捨てられたんだ」

「へえ、それはそうと、歩けるかい?」

フウマはもはや聞いていなかった。

「歩けるわけがないだろう、こんな縛られた状況で」

「はいはい、そいつはよかったね」

フウマは樽のように担いでギルドまで運んでいった。

「おい!下ろせ!下ろせよ歩くから!」

「おや、歩けないんじゃないのか?」

「いちいち『盗人』の言うことを真に受けやがって。それでも『善人』か?」

何か思うことがあったのだろう、フウマはぐんとスピードを上げて走り出した。

「おや、客人かね珍しい」

マスターは新聞を読んでいた顔を上げた。

「しかも、文字どおり『訪ね』てるみたいじゃない」

マスターは少年の顔をまじまじと見た。

「権力者サマのお出ましか」

縄がぐいと伸びた。次の瞬間、網ははじけ飛び、少年の全貌が明らかになった。

右手を左目に当てると、左目が金色に輝きだし、右手は化け物のよ

うになって、金髪の中にほんの少し緑の髪が混じった。

「お前さん、ヘンゼルか」

「悪いか」

耳を疑った。こいつが『牙の主』になるために必要だと言うことか？

「全・員！はじけ飛べ！」

ヘンゼルが刀を取り出して構えた。

クロノの方に向かっていく。

クロノはカードの塊を取り出し、素早くシャッフルして一番上のカードをピツと引いた。

くるりと絵柄をこちらに向ける。

「守り札（もりふだ）はダイヤのA」

バリヤが現れ、ヘンゼルを弾き飛ばした。

「切り札はスペードのA」

同じようにしてカードを引き、今度は投げた。回転カッターとなってヘンゼルに襲いかかる。

たちまちのうち、またヘンゼルは捕まった。

「ヘンゼル、捕まえた♪」

ヘンゼルははっとした。

（ヘンゼル、つくまぐえたっ！）

「・・・」

「お前さん、魔物じゃが、元は人じやろう。誰の仕業じゃ」
くいくいと手招きをした。

耳を向けると、突然かみついてきた。

「いってえー！」

「ハハハ！」

「誰の仕業じゃ」

問い詰められ、観念したのか渋々答えた。

「・・・大魔王オウノの部下、アベルとか名乗っていた」

「何じゃと」

どうかしたのか？

「そいつ、誰なんだ？」

「オウノは神と戦争を起こし、たった一人で天界を壊滅させ、世界樹の井戸を奪っていった最強の魔王じゃ。そしてアベルは、恐ろしいほど頭のよい謀略家じゃ」

　　ということは、もしかしたら、帰れるかもしれない。その思いが俺を突き動かした。

「おい、お前。さっきのは無しにしよう。お前の望みを一つ手伝ってやる、代わりにそれが終わるまで俺の仲間になれ」

「どうせ無理だけどね」

「言ってみろよ」

「グレーテルを見つけること。そして人に戻ること」

「何だ、人捜しと調べ物だけじゃないか」

　　このとき俺は知らなかった。あいつのことも、あの戦いも、そしてあの結末も。

ZADNA計画 for Z
始動！ZADNA（ザドーナ）計画

コンコンとドアがノックされる。

「誰だい？」

「サドです」

「ああ、入りなさい」

涙を流した青い仮面をつけた男が部屋に入ってきた。

「アングリーから伝言です。「Z」と「メイン」が接触した模様」

「へえ、面白いことになりそうな組み合わせじゃん。じゃあ、例のアレを置いてきて」

「分かりました」

「んー、わかってない」

男はサドの腹を蹴った。派手に吹っ飛び、壁にめり込むサド。やがてどさつと音がした。

「かつ、はっ……」

……

『かしくまりました』だろーがッ！」

「か、かしくまりました」

「よし、合格。出てっついでいいよ」

仮面の男が出て行ったあとで、男はニタアと笑った。

「さあて。楽しもうじゃないか」

心の底から楽しんでいることを証明するように、くつくつくと笑いを漏らす。

「終わりのオー！、始まりだア！」

部屋の中に、声が反響する。

「始めようじゃないか、ZADNA計画を」

……

「なあ、象って言われて、思いつくことはあるか？」

ヘンゼルは横目でにらんできた。

「なんで知ってる?」

「よし、あるんだな」

「・・・ないことはないと言うだけの話だ」

「じゃあ、はいてもらおうか」

「グレーテルに、象のぬいぐるみをプレゼントした」

このいかつい見た目でぬいぐるみ・・・これがギャップ萌えというやつか。

「どんな象だ?」

「白い」

「・・・それだけ?」

「丸い」

「・・・ほかは?」

「・・・」

ダメだ。こいつ、話しながらない。

あ、とマコがつぶやいた。

「白くて丸いといえば、コウガさんとフウマさんが出てる時、こんなもの拾ったんですよ」

何かの卵のようなものだった。かなり大きい。

「何の卵だ?」

「さあ。わかりません」

おい、わかるか?」

（「不思議な卵」 命が宿っている。もうすぐ生まれそうだ）

え?そんだけかよ。

（だって仕方ないじゃん、興味ねーし）

お前医療の神だろ、生物ぐらい覚えとけ。

（・・・アアアアでいおす!）

あ、逃げやがったあいつ。

まあ、オッサンはほつといて、この卵だが・・・

「育てるのか?」

「はい!」

「大丈夫か？」

「はい！」

「多分魔物だぞ」

「・・・ハイ」

大丈夫か、これ？

「・・・チツ」

ヘンゼルが急に立ち上がった。

「どこへ行くのじゃ？」

「さあな。グレートルを探してくる」

「そうか」

「止めるのか？」

「いや、止めぬ。ただー夕飯までに帰ってこい」

「・・・フンツ」

・・・

(どうやら気づいているようだな。まあ、別にいい。ここを出て、その先は分からねーだろ。)

「・・・残念じゃったな。すべてお見通しじゃよ。ただ、わしには止めれんだけじゃ。犯罪を演じようとする手品師など」

「あれ？マスター何か言いました？」

「・・・」

いくら待っても質問に返答がない。顔をのぞくと、腕組みをしてあぐらをかいたまま寝息を立てていた。

「あらら。寝ちやいましたか」

その声とほぼ同時に扉が開いた。

「おい！大変だ！」

「どうしたの？」

「帰ってきた！帰ってきたんだよあいつらが！」

「まあ！ということももしかして・・・」

「ああ、あるかもな！」

「何じやもう騒がしい。せつかく気持ちよく寝ておったのに」

マスターは外に目をやった。

「おお、帰ってきよったか」

外には四人、人影があった。

ギルド内がしんと静まる。

「あー、お嬢さん、ちよつとお聞きしていいですか？」

「は、はいい」

マコは震えを必死に押さえている。素人目でも見ただけで分かるほどの圧倒的な力を感じる。無理もない。

「し、知らないおじさん・・・」

そこかよ。

「そんなおびえなくていいよ。ここらに前までフェンリルブレイブってギルドなかった？」

「こ、ここです」

「え？ここ？」

リーダー格らしきおじさんが辺りを見回す。

「あー！ここか！ずいぶん変わったなあ！嬢ちゃんは新入りか？」

「は、はいい」

「ちよつと怖がつてるでしょ。だからひげを剃れっていつもいつてやってんのに。顔が怖いんだよ、おじさんは」

後ろの十代ぐらいに見える女の子がおじさんをこづいた。

「いやいや、男は心だ！」

「おい！遊ぼうぜ！」

フウマが飛びかかる・・・てなにしてるのあいつ？

「ああ、あとでな」

きれいに投げ飛ばされた。本当に何してんだ。

「久しぶりにあったが、何も変つたらんようじゃのう、フィリオス」

「お、そういうじっちゃんも元氣そうだな」

フィリオスと呼ばれた男は笑った。

「で？どうだったんじゃ、依頼の方は」

「いやー、ハハハ」

ガシガシと頭をかいた

「ダメだったわ」

ギルド内がざわついた。

「そんな。あいつらでダメなんて・・・」

おい、全くついて行けないぞ。

「なあ、あの三人つてどんな依頼を受けてたんだ?」

「ああ、二人は知らないわよね。討伐クエストだったんだけどね、成功すれば永遠の名声と地位と島を作れるくらいの金がもらえるっていわれてるようなクエストなのよ」

島を買うじゃなくて、作る?!

「でも、誰も受けないのよ。この千年、あらゆる英雄や強豪って言われる人たちが挑戦したけど誰も帰ってこなかったの。だから、これは十分偉業なのよ」

改めて思う。なんてところに入ってしまったんだ。

「それにしても、フウマもクロノもお前ら15年前から全く変わらな
いじゃないか」

「変わってないもの」

「それに比べて、老けたなエド」

「うっせー。これは男の証なんだよ」

「その子は?」

「フェミーナだ。うちの子だ」

「結婚したの?」

「いんにや、拾った」

フェミーナはフウマのほうをじーつと見ている。

「なんだよ?」

「お前、弱いな」

「なっ」

「父さんに投げ飛ばされてたじゃないか。ぼくでももうすこしたえるよ?」

フウマはぶるぶる震えている。

「なら、証明してみせろやー!」

フウマの腕が燃え始める。

「鬼炎爪！」

「水鏡」

フウマが見えないバリア的なもので跳ね返された。

「なっ……」

「かなわないうっていつてるでしょ」

「まだまだ！鬼炎脚！」

「影置き」

フウマの蹴りは貫通した。

「は!？」

「残念でしたー」

後ろからフェミーナが現れる。

「鬼炎弾！」

炎の玉はまた貫通した。

「ーまたハズレ」

フェミーナが死角からフウマの首に腕を回す。いつの間にかケーキくつとるし。

「あれ!?俺のとおっておきのケーキ!給料三か月分はたいて六時間並んだのにいいー!」

どんまいっす。俺は心の中で合掌した。

「これがもしナイフだったら」

フォークを首の上で滑らせた。

「アンタは死んでた」

「くっ……」

「ハッ！」

「くそうるせー!」

フウマの全身が燃える。フェミーナはすぐに手を離した。

「誰が誰より弱いってえ?言ったよな!俺が依頼をクリアしたらお前は俺の部下だぞー!」

「冗談でもやめとけよ」

今まで一言もしやべっていなかった男がしやべった。影薄いなあ。
「お前なんか勝てない。ファイリオスに教えてもらえ」

「はあ!?なんで俺が「ガキは嫌いなんだよ」

言い切る前に男は声をかぶせていった。

フィリオスはしばらくガシガシとかいてため息をついてからフウマにいった。

「この後、俺の家に来い。お前の仲間も一緒にだ。いいな?」

その言葉には圧があった。誰にもノーとは言わせない強さがこもっていた。

.....

コンコンと軽くノックする。

「おう、入れ」

部屋にはフェミーナとフィリオスがいた。

「じゃあ、フェミーナはお茶を入れてきてくれ」

「はいはい」

フェミーナが部屋を出て行った。残されたのは、フィリオス、フウマ、マコ、俺、フェルナ、クロノの6人だ。ヘンゼルはどこに行ったのだろうか?」

「さてと、依頼の内容は覚えてるか?」

「確か人型の怪物の集落の破壊と殲滅だろ?」

「そうだ。その人型の怪物の正体。それはー」

いったん言葉を切って小声に変えた。

「鬼だ」

鬼。前世(?)では縁もゆかりもなかったが、この世界ではなぜか俺は鬼と関係するものによく合う。

「なら、モモタロウのフウマには楽勝なんじゃないか?」

「いいか、モモタロウはあくまで、余ダメージが増えるだけ。免疫はゼロなんだよ」

なんかゲームみたいな言い方だ。

「いいか、これを見る」

フィリオスは服をたくし上げた。現れたのは、えぐられた跡の残る腹。

「鬼にやられた。これだけじゃない。両手、両足、そして左目もだ」
フィリオスが義手を目に入れるとかしゃん、こつんと音がした。

「俺はもう娘の頭をなでる感触が一生分からない。いいか、鬼にとつて人間は、俺らにとつての鶏同然なんだよ。食料だから、食うのが当たり前前。そういうことだ」

俺たちは黙ってしまった。

「そうだ、ついでに伝言だ。マスターより、クロノに占ってほしいことがあると」

「なあに？」

「新しく入ったらしい、ヘンゼルとか言うやつ居場所だ」

「はいはい」

カードを出すとシャツフルしてその中から一枚引いた。

「場所は『カワノ平野』みたいね」

「なら、そこに行ってくれ」

「私は受付があるわ」

「私も急ぎの仕事が」

「わ、私は『出かけたら鬼に食べられちゃう病が・・・』」

おい、最後。どこの長っパナ狙撃手だよ。

「じゃあ、三人で行ってくれ」

「い、いや、だから・・・あつあいたたた腹痛がつ！腹痛がああああああ！」

「そんだけ叫べたら大丈夫だ」

「うう・・・」

その頃、当のヘンゼルは洋館に入るところだった。ボタンと音を立って扉が閉まる。

「俺は、ただ笑いたかっただけなのに。グレーテルに、喜んでほしいだけなのに。馬鹿みたいに笑えば、誰も気味悪がらないだろうか。食べ物売ってくれるだろうか。馬鹿みたいに・・・そう、ちょうど」

ヘンゼルは写真を撮りだした。そこには、大口を開けて笑うフウマが写っていた。

「ーこんな風に」

「うるさい」

フィリオスはマスターの言葉をそのまま言った。

「ひどくひねくれた、かわいそうなガキなんだと」

「・・・身長は？」

「お前より高い」

「・・・」

「ま、気にすんな。お前は俺から見ても強いからな」

「ごめんなさい」

「は？オイオイ急にどうした」

「私のせいで、おじさんはー」

フィリオスはほんと頭を手をおいた。

「その話は無しだと言ったよな。俺が気にしてないんだから、お前が気にする必要はない」

「でもー」

フィリオスは口到人差し指を当てた。

「騒ごうが喚ごうが、俺の体は戻らない。それにお前が生き延びたという結果に満足してるんだよ俺は。だから、お互いこの話はなしな」
「・・・」

「ほんとうに、それでいいの？」

その声に、二人は振り返った。

「クロノ、お前まだいたのか」

「ええ、話は聞いたわ、本当にそれでいいの？」

「女の子二人に心配されるのはそれはそれでいいが、なに、無くてもやっていけるよ。それにー」

「それに？」

「戦士の勲章みたいでなんかかっこいいだろ」

「・・・」

.....

「さあ、ついたぞ」

「ちよつとまで！」

「どうした?」

俺はさつきからずっと思っていたことを口にした。

「吐きそう。吐かさせて」

「いや、のんびりするわけにはいかないだろ?」

「そうはいつでも・・・」

「うおるおるおるおるおるおるおぎよやべばー!!!」

「すでに吐いてるやついるし」

「・・・」

フウマはためいきをついた。

ひと

「他人がゲロつとるとこ見たくないし向こうにおるわ」

フウマの影はやがて見えなくなつた。

う、うおえええくと言いながら胃の中をひっくり返す。あの二人、これを知ってたから来なかつたんじゃ?

そんな二人の様子を木に隠れて見ている影があつた。

「たぶん駄目だと思うが、まあ、一応」

そうつぶやくと、銀色の横笛を口に当てた。

「何だ、この音?」

俺たちは周囲を見回した。

「あれ?コウガさん」

「どうした?」

「なんで、笑ってるんですか?」

え? 本当だ、無意識に笑ってる。

「マコも、笑ってるぞ」

「え?」

そうして、意識が遠くなり、俺たちは笑顔のまま草の上突っ伏した。

.....

「二人とも遅いな。何やってるんだ?」

フウマはイライラと貧乏ゆすりしながら待っていた。

「先に行くか」

地面にメモを置いて、フウマは歩き出した。

それからしばらくして。

「おかしいな…」

「何が？」

カピバラのようなものが急に出てきて、フウマはひっくりかえりそうになった。

「あ、ああ、いや、川がないなって」

「川？このあたりはずつと森よ。川なんてないわ」

「あれ？上から見えたのに」

「上？もしかして時の川じゃないの？」

フウマは首をひねった。

「なんだそりゃ？」

「時の川は、宇宙を流れる広大な川で、流れも時と同じように、過去から未来に流れてるの。学者の話では、今日中にはポロロッカ現象が起きるそうよ」

「ポロ？」

「星の力で、川が逆流するのよ。時の川でも時々起こるの。その時だけは、未来から過去へ流れるのよ」

フウマはあごに手を当てた。

（何で、そんなところに用があるんだ？あいつの目的は何なんだ？）

「どうしたの？」

カピバラ星人（と、言うことにした）は、フウマの顔をのぞき込んだ。

「いや、なんでもない。ありがとう。あと、ここらに人間が来なかったか？」

「ええ、来たけど。向こうに行つたわ。あなたの知り合いなの？」

「まあ、そうだ。ありがとう」

フウマは歩きだした。

（本人に吐かせるのが一番早い。ぶん殴つても聞いてやる）

フウマは言われた方向にしばらく歩いた。そして――

「・・・でかつ！」

巨大な洋館が目の前に現れた。

(間違いない、あいつはここにいる)

フウマはそう思った。

(じゃないと、これ以上歩き回るのは嫌だ！)

重い扉を開けると、きしむ音が反響して飛び交う。

「やあ、フウマ」

声に顔をあげると、ヘンゼルが二階の回廊から見下ろしていた。

「ヘンゼル。どうしてこんなところにいるんだ？」

ヘンゼルは奥へと歩き出した。

「まあ、時間はあるし立ち話じゃあ疲れるだろう？おいだよ」

「・・・？」

フウマは妙に落ち着いたヘンゼルに違和感を覚えた。それでも、ここで引き返せば何もわからないままだとわかっているから、導かれるまま奥へと進んだ。

「とりあえず、お茶と菓子だよ。ありあわせだけどね」

「おい、お前は俺が嫌いだろ？もてなしてどうする」

ヘンゼルは紅茶をいれながら答えた。

「君の笑い方が気に入ったのさ」

「はあ？おい、どういうことだ」

「まあまあ、焦らないで・・・」

フウマはテーブルをたたいて立ち上がった。

「話す気がないなら、帰る」

フウマはドアの方向にすたすたと歩いて行った。

「あ、そっちは裏口・・・まあいつか」

・・・・・・・・・・・・・・・・

フウマはドアを出た瞬間その存在感に気おされた。

「何だこりゃ・・・石像？」

あたりにはとても細かい石像がびっしりと並んでいた。

「あいつ、なんで石像なんか集めてるんだ？」

「欲しかったんだよ。自分に合った笑顔が」

後ろに、ヘンゼルが立っていた。

「おい、どういうことだ？笑顔って、なんだよ？」

「よく見てごらん。みんな笑ってるだろう？」

言われたとおり、すべての石像が笑っている。

「なんで、こんな数の石像を・・・」

「ああ、石像じゃないよ、全部」

.....

「ねえ、そのヘンゼルってやつ、どんな魔法を使うの？」

「そうだなあ、今の若い奴は知らねえだろう魔法だ。それは昔、一人だけ、完全に従えた者がいた」

「一人だけ？」

「そう、一人だけ。その魔法は、感情にのまれてはならない。でも、感情を最高潮まで昂らせなくちゃならない。その魔法の名はー」

.....

「こいつらは石像じゃない。魂がないんだ」

.....

「終焉へと導く最終の物語。通称『オメガストーリー』。過去唯一、それを従えたものはこう呼ばれた。ただ、『理不尽』と」

フェミーナはしばらくものが言えなかった。

「うそでしょ!?そんな奴とあのバカをぶつけるわけ?!正気？」

「ああ、あいつは馬鹿だ。どうしようもなく馬鹿だ。救いようのない馬鹿だ。でもな、ミーナ、覚えとくといいぞ」

「何を？」

「そんな救えない馬鹿にしか、救えない奴がいることを」

.....

「どういうことだよ、魂がないって」

「そのまんまの意味だよ。俺の魔法は感情を操る。魂を抜くことも、魂になることも可能だ」

ヘンゼルの姿が消え、近くの石像が動いた。

「こんな風に、乗っ取ることもできる」

フウマはヘンゼルをにらんだ。

「そんな力で、何をしようとしている？」

「簡単だよ。いや、君たちには、簡単なことだよ。俺は、ただ…笑っていただけ」

フウマはぼかんとした。

「たったそれだけのために、魂を抜いただど？」

「お前にはわからないだろう。お前は呪いを受けていないんだから」

ヘンゼルは銀色の横笛を鳴らし始めた。フウマの顔は笑い出し、それをお食い止めようとしているためひきつった笑顔になった。意識が遠のき始め、思わず後ずさりをして、何かにつまずいてこけた。

フウマは衝撃で正気を取り戻し、自分がつまずいたものを見て飛び上がりそうになった。

「コウガ！」

そして、その倒れたコウガの石像の近くに立っていたのは…

「マコー！」

フウマは二人を担いで逃げ出した。

フウマはぐんと高度を上げた。

あのカピバラ星人の言ってることが本当なら…

下を見ると、宙に浮いた川があった。

「よー！」

フウマはその時を待った。

「おや、偶然同じところを目指していただなんて」

ヘンゼルが現れた。

「これは驚いた。何をやる気だい？」

「それは…」

波が上がった。それまで静かだった川が大きな音を立て始めた。魚をついばんでいた白鳥は波を浴びて、若鳥からヒナ、そして卵に

戻ってその後消えた。水面を飛んでいた大きなチョウも、さなぎから幼虫、卵、そして消えた。時の逆流が始まったのだ。

「こうするんだよー！」

フウマは二人を川の中に放り込んだ。

「へえ、なかなか賢い選択だね。でも、もうあの二人はいらない。俺に合った笑顔ではなかった」

「は？お前に合う笑顔って、なんだよ？」

「俺は馬鹿みたいに笑いたかったんだ。ちようど・・・」

ヘンゼルが波を指さした。波の内側には、時の記憶が移っている。

「あんな感じでね」

それは、大口を開けて笑うフウマだった。